

認識的正当化の遡行問題への三つのアプローチ

基礎づけ主義・無限主義・デフォルトと挑戦の構造

阿部裕彦(慶應義塾大学)

ある信念(信念は命題の形で表されるとする)Pについて、「Pと知っている」という主張を考えてみよう。直観的に、「なぜ」と理由を問い続けることにより、いつまでもPという主張の正当さに疑問を付すことができるように思われる。きわめて砕けた言い方をすれば、これが認識的正当化の遡行問題と呼ばれる問題である(Klein 2007, pp.1-3)。

本発表ではまず、こうした認識的正当化の遡行問題を概観する。次に、この問題に対する回答として三つの立場を整理する。第一の回答は基礎づけ主義、第二の回答は無限主義、第三の回答は R.B.ブランダムによる「デフォルトと挑戦の構造(default and challenge structure)」である。第一と第二の回答は従来から現代認識論で論じられてきた立場であるが、これらと第三の回答との関連は必ずしも明らかでない。本発表では、ブランダムが基礎づけ主義や無限主義との関係でどのような位置づけを得るのかについて論じる。

古くから、基礎づけ主義は、認識的正当化の遡行問題への回答として提示されてきた。基礎づけ主義に対して無限主義が批判を加え、新たな立場を確立している。基礎づけ主義によれば、認識的正当性の源泉となるような基盤的信念が存在し、主体はそれを挙げることによってPという信念に対する理由の遡行を終わらせることができる。しかし、基礎づけ主義に対して、基盤的信念の存在は怪しいという批判がある。というのも、もし基盤的信念が信念以外の何かから認識的正当性を獲得するならばその仕方は明らかでないし、基盤的信念に自己正当化を認めると基盤的信念の恣意的な決定によってどの信念でも正当化され得ることになってしまうように思われるからである(Klein 2007, pp.8-10, pp.14-5; 上枝 2020, pp.120-6; バンジョー&ソウザ 2006, p p.13-21)。

無限主義は、基盤的信念が存在せず、理由の連鎖が無限に続くことを認める。つまり、P に対する一連の理由には常に次に問われるべきさらなる理由が存在する。この無限の連鎖自体がPの認識的正当性を発生させている(命題的正当化)。しかし、無限に続く理由の連鎖のうち主体が気づかなければいけない理由は有限の範囲である(信念論的正当化)。命題的正当化と信念論的正当化の区別によって、無限主義は、理由の無限遡行を受け入れながらも、その遡行は無害だと主張する(Klein 2007, pp.4-10; 上枝 2020, pp.133-8)。

以上のように、基礎づけ主義と無限主義との関係は明らかである。これら二つの立場とブランダムとの関係を明らかにするためにあたって、「理由の構造」と「理由づけの実践」との区別が重要になると思われる。

ブランダムにしたがうと、P に対する理由は、P に対する理由として主体に挙げられただけで「デフォルトの」認識的正当性を持つ。この正当性は、適切に挑戦を受けるまでデフォルトの認識的正当性の地位を保ち続ける。もし「なぜ」と適切に挑戦を受けたにもかかわらず主体がさらに理由を挙げなければ、P に対する認識的正当性は失われてしまう。もしさらなる理由が挙げられれば、P に対する新たな認識的正当性が獲得されることになる。そして、本発表にとって重要なことだが、主体によって挙げられた理由に対する挑戦が適切に為されない場合、その理由は認識的正当性を

を保持することになる。以上のブランダムの説明は「デフォルトと挑戦の構造」として知られている(Brandom 1994, pp.176-8; 白川 2021, pp.104-5)。

なお、ブランダムは、コミットメントと資格付与という二つの規範的地位と、それらの規範的地位を帰属させたり引き受けたりするという二種類の規範的態度によって、独自の仕方では知識帰属の枠組みを提示している。これに伴い、認識的正当化の遡行問題についても独自の定式化をしている(Brandom 1994, p.177 pp.204-6, pp.223-4; Brandom 2000, chap.3; 白川 2021, pp.236-7)。本発表では、ブランダムが提示する枠組みや定式化が、基礎づけ主義や無限主義による議論と接続できることを論じる。

無限主義において、命題的正当化と信念論的正当化という二種類の正当化が区別されている。命題的正当化は信念、すなわち命題同士の関係であり、この関係は主体の気づきと関わりなく成立する。他方、信念論的正当化は、主体が実際に理由を挙げるという実践に関わる。命題的正当化がもつばら理由の構造に関わり、信念論的正当化がもつばら理由づけの実践に関わるものだとすると、次のように整理できると考えられる。つまり、基礎づけ主義では理由の構造と理由づけの実践とがとくに区別されることなく論じられている。他方、ブランダムにおいては、理由の構造についてよりも理由づけの実践が問題にされている。そして無限主義は理由の構造にも理由づけの実践にも言及しており、二つの立場の中間に位置づけられる。

この整理に基づく、ブランダム議論の独自な点の少なくとも一部は、理由づけの実践の重視にあると言えるだろう。以上を踏まえて、本発表では、従来現代認識論で論じられてきた基礎づけ主義や無限主義との比較を通じて、これらの立場とブランダム議論がどのような関係にあるのかを明らかにする。

以上の整理によって、それぞれの立場の問題点も一層明確になる。基礎づけ主義だけでなく、無限主義やデフォルトと挑戦の構造も、認識的正当化の遡行問題を解決する提案としては十分でないかもしれない。無限主義に対しては、主体の気づいていない理由の存在に疑義を投げかけることができるかもしれない。デフォルトと挑戦の構造では、適切な挑戦とそうでない挑戦との区別が曖昧だと言える。本発表では、こうした批判についても、理由の構造と理由づけの実践という観点から整理を試みる。

参考文献

- Bonjour, L. & Sosa, E, 2003, *Epistemic Justification: Internalism vs. Externalism, Foundations vs. Virtues*, Blackwell. [上枝美典訳, 2006, 『認識的正当—内在主義 対 外在主義—』, 産業図書.]
- Brandom, R, 1994, *Making It Explicit*, Harvard University Press.
- , 2000, *Articulating Reasons*, Harvard University Press. [斎藤浩文訳, 2016, 『推論主義序説』, 勁草書房.]
- Klein, P. D, 2007, “Human Knowledge and the Infinite Progress of Reasoning.”, *Philosophical Studies* 134, pp.1-17.
- 上枝美典, 2020, 『現代認識論入門 ゲティア問題から徳認識論まで』, 勁草書房.
- 白川晋太郎, 2021, 『ブランダム 推論主義の哲学』, 青土社.